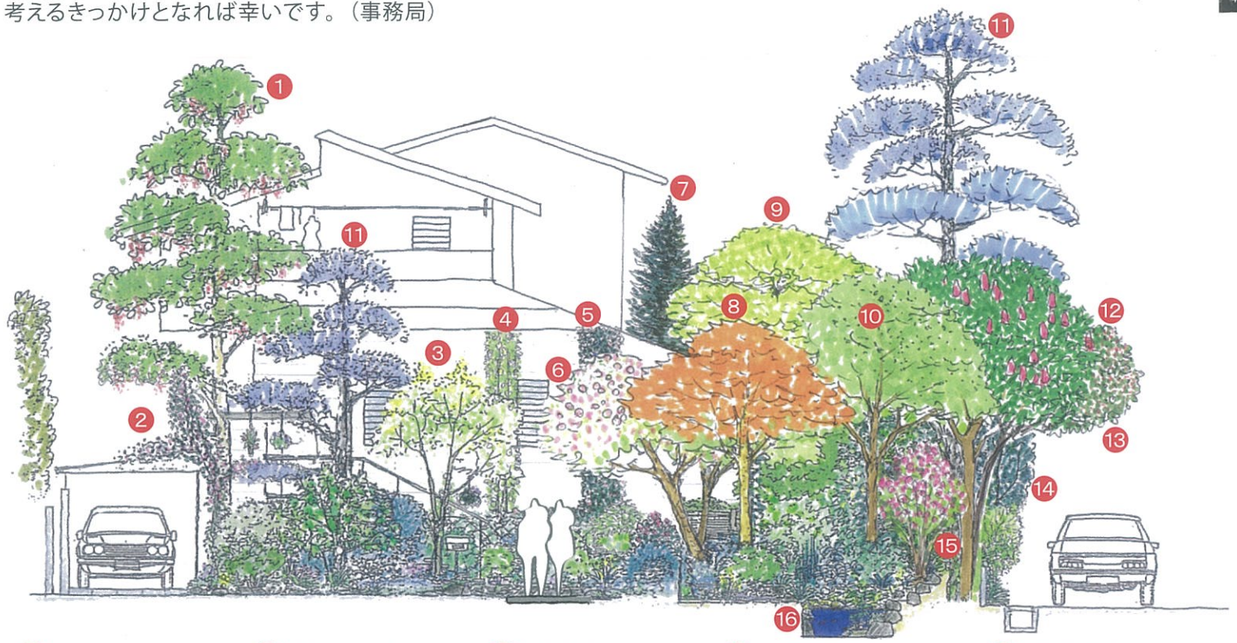
特集記事 庭のみどりからのサービス!

株式会社愛植物設計事務所会長・JGN創立メンバー　山本 紀久

私たちは生態系からさまざまな恩恵を受けていますが、日ごろは意識することが少ないかもしれません。しかし、園芸や造園など、植物に関わることが多ければ、それらを感じるチャンスも多いはず。造園家で、植物の力を生かした数々の公園や庭を手掛けてきた山本紀久さんに、最も身近な自宅の庭で実践されている例を挙げながら、緑からのサービスについて語っていただきます。皆さんが生態系のサービスをより身近に感じ、受ける側として何を意識したら良いか、考えるきっかけとなれば幸いです。（事務局）



① イイギリ
② ツルバラ「舞子」
③ モクゲンジ
④ ナニワイバラ
⑤ ピラカンサ
⑥ アンズ
⑦ ドイツトウヒ
⑧ ハゼノキ
⑨ イロハモミジ
⑩ アメリカザイフリボク
⑪ クロマツ
⑫ ベニバナトチノキ
⑬ ゴンズイ
⑭ 混植生垣
⑮ ミツバツツジ
⑯ 池

南西側から見た我が家の立面図

人を含む動物たちは、太陽の光、大気、降水、土壌、野生生物、の5つの要素からもたらされる、食料や水の供給、気候の安定など、生物多様性を基盤とする生態系から得られる恵みによって支えられていますが、これらの恩恵を「生態系サービス」と呼びます。

具体的には、人の暮らしに欠かせない'衣食住の素材の提供''水源涵養や土砂流失の防止''防風や防塵'など、人が生きるために欠かせない本能に刷り込まれた根源的なもの。二つ目は、'生態系保全''生物多様性保全''気温上昇緩和'など、昨今、人類の生存にとってその必要性が説かれているもの。三つ目は、'遮蔽''庇陰''レクレーション''鑑賞'など、日ごろの生活の中で精神衛生上の恩恵を受けるものがあり、これらのうちわれわれが日常的に実感できるのが、三つ目の、山野のみどりや公園や庭園などの植物や生き物の姿、形、声や行動などから感動を得る恩恵です。

自身の仕事でも、全てのプロジェクトにこれらの恩恵を最大限に生かすことを念頭に置いて進めていますが、それにはまず、自身がその感動を実感する場が必要です。それが唯一自分の自由にできる我が家の庭です。

100m先に千葉市の鷹の台カントリークラブの松林を望む70坪の敷地の家屋周りに庭づくりを始めたのは、今から約50年前。その構想は、クロマツと雑木林が入り混じった周りの風景を骨格として、野山の低木や下草を組み合わせる。野生の生き物も来てほしいので、片隅に小さな溜まり池を…

沿道部に庭のみどりを開放した「春の景色」

「夏の景色」

「秋の景色」

「冬の景色」

朝露が蜘蛛の巣をヴェールに変える!

マツの枝で子育てするヒヨドリ

馴染みの池の主ヒキガエル

イイギリの実で飢えをしのぐヒヨドリのシルエット

ということで、まず池を掘った土で背景などの地拵えし、その後の植栽は、地主さんの山から頂いた3m程度のクロマツ、コナラ、イヌシデ、ゴンズイなどで骨格をつくり、これを彩るイロハモミジ、ミツバツツジ、マンサクなどは、苗木で補強… その後の植栽は、それらがつくりだす環境に合わせ、山登りや現場の片隅から持ち帰った種や実生苗を少しずつ添えていく… クロマツの足元には、幹を彩るツタ、テイカカズラ、ビナンカズラを植える… さらに魅力的な外来種や園芸種も試験植栽という気持ちでこれに加える… という繰り返しによって、自然から教わりながら楽しむという一石二鳥!

その間の管理は基本となる「間引き・剪定・補植」を柱とする手入れ… 今は7mを超す樹木の剪定も全て自分で行って、そのコツを学ぶ… この間に、苗木や実生から大樹になったホオノキ、イイギリは勤めを終えて暖炉の薪に…

また、ここを住処にしたり、訪れる常連の生き物もその時代を反映して変化するので、居ながらにして日本の気候変動や生態系の変化などが実感できます。

刻々、日々、四季折々、時代を通して、多様な動植物から受ける感動を享受できる我が家の庭こそが、自身にとっても仕事にとっても、生態系からもたらされる最大のサービス空間なのです。

このようにどんなに狭い空間でも、そこに適した植物を植えることによって、自然はそれに応じた恩恵を与えてくれますが、受ける側はそれに応えるために少なくとも以下の三つのことを意識する必要があります。

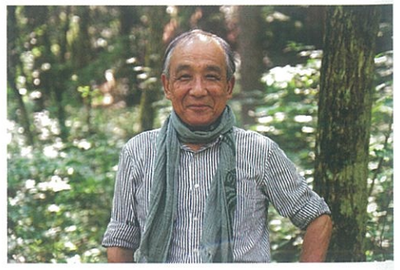
① 地域性の樹種の導入 ： 地域に自生または古くから土着している樹種を複数組み合わせることによって地域のみどりの多様性が増す
② 周辺空間へのみどりの開放 ： 生垣、透過性の高い囲障、低い壁などによって、庭のみどりを周辺に開放することによって、生態的にはビオトープネットワーク効果が、見た目には、奥行き、広がり、繋がりによる景観効果が生まれる
③ 適切な管理 ： 地域に開かれたみどりである以上、特に外周のみどりについては、枯れ枝、つる草、病害虫の被害などは、常に意識して除去しておくことが大前提

一年おきの春（みどり摘み）秋（もみあげ）に行うマツの手入れは季節の行事

自然の趣を残しながらの「枝透かし剪定」によって鬱陶しさを解消する ※「夏の景色」の剪定後の様子

以上が、自然の生態系が私の小さな庭を通して与えてくれるサービスですが、これを長続きさせる鍵はただ一つ。常に身の周りの自然の変化に目を凝らし、できるだけ自然の生態系に負荷をかけないことを心掛けることです。特に近年の気候変動による豪雨の被害はけた違いで、政府は2020年度の堤防整備費として6200億円を計上していますが、予算には限りがあるので、自然環境が持つ多様な機能を活用して、災害のリスクそのものを下げる「グリーンインフラ」の取り組みが注目されています。「グリーンインフラ」は、社会資本の充実を指向する用語で、コンクリートで固めた堤防やダムを意味する「グレーインフラ」の対語として語られます。

その取り組みに今すぐ参加できるのが、家周りの「グリーンインフラ」化です。コンクリートやアスファルト面を極力少なくし、敷地に樹を植えて雨水を浸透させ、保水する力を高めることです。現在京都では、透水性舗装による交差点に一時的に雨をため、徐々に浸透させる「雨庭」をつくるなどの取り組みがされています。駐車場だけでみどりのかけらもない家が増えている現在、せめて透水性のある舗装にする協力なくしては、自然からの恩恵は急速に減少していきます。

山本 紀久（やまもと のりひさ）プロフィール

1963年東京農業大学造園科卒業後、第一園芸造園部に入社、1973年愛植物設計事務所設立、代表取締役社長を経て現在会長。「技術士」、「RLAフェロー」の資格を持ち、「東京ディズニーランド」、「八景島シーパラダイス」、「沖縄県総合運動公園」、「海洋博公園熱帯ドリームセンター、郷土村・おもろそうし園」などの植栽設計・監理をはじめ、数々の仕事を手掛けてきた。主な著書に『街路樹』（技報堂出版）、『造園植栽術』（彰国社）。黄綬褒章、「造園植栽術」著作で日本造園学会特別賞、日本造園学会上原啓二賞を受賞。